



懇談会の席で新帰国者の体験報告を聴く皆さん

第二回定例会開催

二〇〇四年の定例会は、十二月十五日(水)十三時三〇分からばるるプラザ千葉で開催されました。新帰国者九名の参加があり、出席者は来賓を含めて総勢四五名と盛会でした。

品川洋之助会長の挨拶の後、JICA東京及び千葉県総合企画部の三人の講師による講演が行われました。(詳細は二、三頁)

JICA
ボランティア
千葉

SVニュース
第2号

続く懇談会では来賓と新帰国者の挨拶後、講師、来賓も加わって自由に話し合いました。

司会はJICA(千葉県国際協力推進員)の大山美砂子氏で、書記は岡本芙佐子会員と山野辺恭夫会員が当たりました。

十六時三〇分閉会。その後の有志による懇親会でも、有意義な意見交換が行われました。

千葉県ボランティア 家族連絡会に参加

JICA東京、青年海外協力隊千葉OB会に当会が加わって三者共催となつてからは二回目の家族連絡会が十月三十日(土)ばるるプラザ千葉で開催されました。

この家族連絡会は、遠い途上国に派遣中の若い隊員の身を案じる留守家族の不安解消に役立てようと、協力隊千葉OB会が長年開催してきたものです。

今年も企画運営の主体は、協力隊OB。高橋英雄元隊員の名司会で、留守家族を中心に、来賓、主催者を含め八〇名の出席者が、大いに盛り上がりしました。

当会からは、品川会長以下役員五名と久保田譲さん、中川安

二〇〇五年度定期総会案内
五月二十八日(土)十三時半
場所 ばるるプラザ千葉



家族連絡会の会場風景

隆さんが参加し、梅谷陽子副会長が任地(ホンジュラス・婦人服製作)での体験報告をしました。

海外技術研修員への 日本語教育を担当

千葉県総合企画部の要請を受けて、十月六〜十四日の間、海外技術研修員の日本語教育を当会が担当しました。内山初枝さん、品川雅子さんなど日本語教育専門家の指導は、タイ、ベトナム、フィリピン、ブラジル、アルゼンチンからの若い七名の受講生に好評でした。

また研修員たちの生活相談を、十二月末の離日まで、役員総出で引き受けました。

(関連記事三頁)

常日頃より元気で活躍されている皆様のパワーには感謝しております。その皆様のパワーを最大限に活用させていただいているJICA東京を代表し、会報を通してご挨拶とお礼を申し上げたいと思います。

(特別寄稿) シニアパワーに期待!

小樋山 覚

JICA 東京国際センター所長

他方、新しい出会いには自分のやってきた事からは全く想像できない事も引き起こすのではないでしようか。私も、この歳になつて「目から鱗が落ちる」とはこのことだ! と思うことがよくあります。

信念と好奇心。この二つがあればシニアだからといって、いやシニアだからこそパワー全開で突き進めるのではないでしようか。

さて、シニアボランティアを含むJICAのボランティア制度は、いま大きな転換期を迎えようとしています。ボランティアのボランティア性をより強く、そしてJICAはそんなボランティアを支えることに力を注ぐ。JICAが主体となつて途上国に行つていただくのではなく、JICAの制度がなくとも途上国に飛び込んで行きたい、でもどうやって機会を探したらいいのか分からない人々に機会を提供する。そんなボランティア精神の基本に立ち戻ります。

私こと小樋山も今年は五七歳を迎えることとなり、みなさまの活動には個人的にも関心をいだいて参りました。今はJICA東京所長として、仕事ではそれなりに土日を問わずに土日を問わずに東奔西走(?)しています。が、はたして一個人として皆様のよう活動できるのだろうか? そんな疑問があります。

いまこそ、そんなボランティア精神をしっかりと身につけた皆様の「出番」です。

第2回定例会 2004.12.15

ご出席の来賓は講師三人と
次の皆様でした。
深沢公男氏(JICA青年
海外協力隊事務局チーム長)
大橋孝一氏
(千葉県国際センター長)

掛川周男氏(SV経験を
活かす会会長)
鈴木庄一氏(SV経験を
活かす会副会長)
三つの講演の要旨は次の通
りです。(文責編集者)

ボランティア事業の 今後について

講師 小樋山 覚氏
JICA東京国際センター所長



小樋山所長の講演に対して会
員から次の質問があった。

- ① シニアボランティアへの生
活費減額の意図はなにか?
 - ② シニアボランティアの仕事
も後任が必要な場合が多
い。JICAは、後任確保
をどう考えているのか?
 - ③ 専門家とシニアボランティ
アの能力をJICAはどう
評価しているのか?
- 以上の質問に対し小樋山所長
が、JICAの考えを説明した。

千葉県の国際政策について

講師 西織 哲大氏
千葉県総合企画部副主幹

県政全般における千葉県の国
際政策については、次の3ステッ
プで展開している。

- ① 「変革と創造」(基本理念)
- ② 「あすのちばを拓く一〇のち
から」(中長期的基本指針)



③ 「アクションプラン」(年単 位の行動計画)

県の国際政策の最近の特徴的
な動向は、民間の力を生かすとい
うことである。

第一に米国ウィスコンシン州
との姉妹交流については、従来の
行政主導型、友好・親善中心か
ら、「千葉ウィスコンシン協会」
の設立による民間と行政の連携
型、バイオマス・経済交流など実
のある交流への拡大を行っている。

第二に国際貢献の分野だが、こ
れも民間との連携を重視し、NG
O・NPO等による国際協力への
支援を始めたほか、今年度に実施
するベトナムスタディーツアーを
基に、有識者等の意見を踏まえ、
十七年度に千葉県の国際協力の
全体像を確立したいと考えてい
る。

第三に、地域作りの観点からの
国際化の推進ということ、さま
ざまな機関との協力による産学
官の連携推進や国際拠点の整備
推進等の環境整備、さらには海外
企業や外国人観光客の誘致促進
を行っている。

このような県民の力を重視す
る流れの中、シニアボランティア
の会にも海外技術研修員受入に
関し協力をいただいているところ
だが、さらに、地域に根ざした活
動について活躍を期待している。
また、民間と行政の連携に関し、
現場の感覚に根ざした県に対す
る意見や提案を積極的にお願
いしたい。



早春の候、会員の皆様におか
れましては、益々ご清栄の事と
存じます。

さて当会も、設立
後2年目を迎えて、
会員数は五〇名を
超し、今までのJICA・OB会として
の限られた活動か
ら、千葉県海外研
修員受け入れ事業
への支援など、活動
の幅を広げること
が出来ました。これ
も役員、会員の皆様
のご協力のお陰と
心から感謝申し上
げます。

JICAの海外シニアボラ
ンティアとして自分の専門技
術の移転を通じて得た経験を
活かし、帰国後、JICA関連
事業への支援、国際交流会活
動への参加、海外活動の経験を
踏まえた体験講演など地域社
会への関わり、そして行政の海
外関連事業への参画や支援な
ど、必要とされる場を見つけれ
るボランティア活動を行うのが、会
の基本と考えています。

力をあわせて 活動の場を広げよう！

会長 品川洋之助

JICAのシニアボラン
ティア募集説明会、出前講座、
海外経験講座などへの講師派
遣には、出来るだけ大勢の会員
の方に参加をお願いしながら、
各地の国際交流活動への参加
及び海外研修員の世話や日本
語講座などは役員と一部の会
員で対応して参りました。

今後、更に活動の範囲を広
げ、より活発化するためには、
会員の皆さんの参
加が今まで以上に
必要とされます。そ
のためには会員と
役員の一層の意思
疎通、情報交換を行
い、会員の意向、意
識を十分わきまえ、
それらを踏まえて会
の活動への参加を
呼びかけようと思
います。

去る十二月十五
日に開催した第二
回定例会では、出席
会員との懇談会などで親しく
意見交換を行い、またそのとき
の意見を踏まえて、会員の意向
を知るためのアンケート調査
を実施致しました。以上述べま
したように、今後は、活動の幅
を広げながら、原点を失わず、
着実に活動を続け、実績を積み
重ねたいと願っております。

今後とも会員の皆様の一層
のご支援を切にお願い申し上
げます。

JICA創立以来三〇年間の
事業の流れを振り返りながら、緒
方貞子理事長の下で独立行政法
人として新発足したJICAの
現在と将来について解説。これか
らは今まで以上に、成果重視、現
場重視主義に徹して行く。国際協
力を日本の文化にし、顔の見える
援助をする。このため開発教育を
充実し、ボランティアなどの国民
参加型援助を助長、促進して行き
たい。シニア海外ボランティアに
ついては、青年海外協力隊などと
のボランティア事業の一元化を
はかり、2005年度募集より処
遇などの見なおしを行う。
(一頁の特別寄稿「シニアパワ
ーに期待！」を参照)

第2回定例会 2004.12.15

そこで、千葉県JICAシニアボランティアの会に全面的な協力を仰ぐこととしました。具体的

県では、千葉県海外技術研修員受入事業を実施しております。本事業は県の国際協力事業の一環として、アセアン諸国等の開発途上国より研修員を受け入れ、県内の民間企業や大学、県の研究機関等で技術や知識を習得して貰うことを目的に昭和五七年度に開始しました。今年度まで世界二十九カ国から延べ一一五名の研修員を受け入れてきたところです。

従来、研修期間が八ヶ月あり、うち一ヶ月半はO.V.T.A(海外職業訓練協会)に委託して日本語研修を実施していましたが、今年度より事業の大幅な変更があり、研修期間も三ヶ月以内に短縮され、O.V.T.Aでの日本語研修も廃止したため、県としても事業実施の工夫がせまられました。

シニアボランティアの会と連携して実施した 海外技術研修員の受入事業

講師 久保田 園子氏
千葉県総合企画部副主査



には、来日後に一週間程度行う日本語研修の講師、研修機関と研修員の事前面談時の通訳、滞在中に研修員が悩みを抱えた場合に相談を受けていただくなどをお願いしました。

今年度は初めての試みだったので、研修員、貴会の双方にとってどういう結果になるのかは蓋を開けてみないとわからない状況でしたが、日本語研修の成功だけでなく、研修員の視察をコーディネートしていただくなど、当初お願いした内容以上のご協力をいただいたおかげで本事業を無事に終了することができました。行政と県民が力を合わせて素晴らしい結果を残せたと言えると思います。

来年度以降も研修員の受入は続きます。今年度の反省点は改善しながら、また皆様と一緒に事業を行っていききたいと思っています。

歓迎！新帰国者

定例会のもう一つの目玉は、新帰国者の歓迎です。今回の出席は次の九名の方々でした。
堀端俊雄さん(ラオス)、藤田俊夫さん(ヨルダン)、有光武臣さん(ホンジュラス)、井川正子さん(チニジア)、加藤哲男さん(ボリビア)、斎藤健・富貴子ご夫妻(カラガア)、柏尾英彦さん(モロッコ)、尾崎進さん(タイ)。

時間の関係で一部の方の帰国挨拶を割愛、次回繰越となったこととお詫びします。

大きく育って欲しい海外技術研修員

「千葉が大好き」、陽気な若者たちでした

奮闘した日本語教師陣

六月、スリランカの大学で日本語を教えていた品川会長夫人に、電子メールで相談したのが、このプログラムのスタートでした。来日前の研修員に送る日本語教材の選定、カリキュラムの編成など、帰国直前の一繁忙しい時期に快く引き受けて下さいました。

一人三役？大変忙しい立場の内山会員も、「十月は空けておくから」の約束通り、初級コース四名の面倒を見てくれました。

研修員寸描

◆研修地である鴨川の第一夜は淋しくて泣きとなったアウ君。病院の皆と仲良くなつて、最後は

「別れが辛かった」と話していました。国立病院の薬局長。

◆サッカー好き、剣道五段。歯科医を開業しながら母校の助手も勤めるトモミ君。研修の成果に大満足でした。

◆新米建築士。CADソフトを習得するため、毎朝一番に出勤、夜も最後まで頑張つて研修先の人気者となったアリシアさん。

◆本が大好き。東京駅前丸善が気に入って「五時間も本を探していた」心理療法師のヤードさん。

◆研修先の大学教授の手配で、中越地震被災地を見学したプティポン君。マンホールの地上露出に驚いていました。交通省で国道計画を担当する土木技師。

◆ホームステイ先で餅つきを体験したジョイさん。毎日真夜中二時まで日本語を勉強していた頑張り屋。アパレル産業のマーケティングが研修テーマ。

◆「能力があれば金持ちになれる」社会主義国で市場経済の美味を狙う最年少二五才のフーン君。貿易会社勤務。

楽しい体験でした

前途有為の外国の若者たちと親しく接する機会を与えられたことを感謝しています。この喜びを会員の皆様にもぜひ味わって貰いたいと願っています。

(楠木 孝雄)

ボランティア活動等への参加希望

JICA 関係	ちば「出前講座」	20人	60.6%
	SV募集説明会	22人	66.7%
	ボランティア家族連絡会	13人	39.4%
	各種イベントへの参加	17人	51.5%
県 関係	海外技術研修員受入事業	17人	51.5%
	各種イベントへの参加	16人	48.5%
活動に参加する人合計		33人	100.0%

旺盛な参加意欲：アンケート調査結果

会員へのアンケート調査に三名が回答(回収率七二%)。ボランティア活動については、三名を除く三二名が参加の意志をもち、当会の事業については、どの項目も半数以上の人が参加意志を表明しました。(右表)

これらの項目以外にも、①他団体との連携、②地域・自治体への貢献、③教育現場への協力、④会員の知識経験を活かした知的サービス提供、⑤国際的な活動等積極的な事業展開への提案がありました。また会員同士の親睦会の開催、定例会での会員講師の起用等のご意見もあり、今後の会運営上大変貴重な資料となりました。皆様のご協力有難うございました。

(黒田昭太郎)



内山、品川両先生を囲む7人の海外技術研修員



ラオスって何処にあるんだ?という話題から始まる位、日本人には知ら

れていない国。東南アジアで唯一、海の無い内陸国でインドシナ半島の真ん中にある。ベトナム戦争中には、ベトナムよりも大量の爆弾を米軍に落とされた国で、広さは日本の本州とほぼ同じだが、人口は五五〇万人。

鉄道は無く、南北を貫く片側一車線の国道十三号線が唯一動脈的な存在。航空会社はラオス航空一社。保有ジェット旅客機はシンガポールからリースしたエアバス(A300)一機だけ。パイロットもベトナム空軍からの借り物ときている。首都のビエンチャンでも数ヶ所離れると道路の舗装はおろか、電化もまだなんて状態だ。

周囲の中国、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムからも完全に取り残された途上国。そこにはまだ手付かずの「大自然」と日本人がとくに何処かへ置き忘れて来てしまった「人情」がしっかりと残っております。

私の担当分野は、国立大学工学部に二〇〇〇年に設立された、「ラオス・日本技術研修センター」に於けるコンピュター指導。先発二名のSV(グループコーディネーター、センター運営

援助のあり方を考えさせられた ラオスでの二年間

堀端 俊雄(我孫子市)

管理担当が半年前から活動中でした。電子機器修理関係のSVが私より半年遅れて着任し、計画通りの四名体制になったのは、最初のSV着任から丸一年後でした。寄贈されたパソコン五〇台(大半は中古)を、携行機材として調達したサーバーでネットワークとして監視する体制の完成と保守、ホームページの作成等に関する指導が私の任務。生徒はセンターの大学の先生方でした。

僅か二週間足らずの赴任前ラオス語講座でラオス語がモノになるわけも無く、英語での指導となりましたが、英語の理解度が満足の行くレベルの先生は少なく、最後まで苦勞の連続でした。大学側からは先生方への米語会話教育を頼まれてしまい、時間外で二時間講義を週二回引き受けておりました。

事業の難しさを実感させられた二年間でもありました。慌てて工業化するよりは、農業のまま今の自然と人情を元手に素朴な田舎旅行が楽しめる観光国なんてのが相応しいのか、なんて感じることもありましたが、それにしても交通機関、通信網、ホテル、レストラン等のインフラ充実が必要であり、まだまだ時間がかかりそうな感じを受けました。

この国では時間がゆっくりと流れており、人々もメコンの夕陽を眺めながらゆっくりとした生活を楽しんでいる様です。

残留農薬のリスク管理

ータイでの体験からー

岩谷 宏司(松戸市)

偏食せずに旬のものを食べる
着任して間もなく同期SVの奥様から「タイの食べ物には安くて美味しいけれど残留農薬は大丈夫ですか?」との質問を受けた。タイに限らず東南アジアでは作物によって地域によって、乾期には害虫が雨期には病害が多発して農薬が頻繁に使われることがある。しかし分解が早い薬剤はどうか?という疑問は多い。数回使用回数が多いのか?たまたま結果として問



ある。しかし分解が早い薬剤はどうか?という疑問は多い。数回使用回数が多いのか?たまたま結果として問

りがちで農薬の使用回数とその残留は必ずしも比例していない。農薬の残留基準はそれを一生食べ続けた場合の数値に基づいているので、偏食せずに、旬のものをいろいろと食べている限り心配することは無いと思われる。

自分の身体機能を高める

地元紙によれば有機栽培、無農薬の表示もあまりあてには出来ないという。見栄えがよくて、値段の高い野菜は避けた方が無難だろう。それは栽培のどこかに無理があるからだ。人の身体は天然の毒性物質に対応するように、合成された毒物に対してもそれなりの分解・代謝・排泄の機能を備えているといわれている。それを信じて自分の身体機能をできるだけ高めておくのが最も賢明かもしれない。

さらに、枯葉剤による農薬汚染もしばしば報道されている。農薬に限らず化学物質の安全性を百分実証することはなかなか難しい。とすれば、危険(リスク)がどれだけあるかの視点から議論が始まる。母乳からダイオキシンが基準を超えて検出されたケースでも現地の専門家は、基準レベル程度の濃度であれば、授乳を止めてしまうリスクのほうが大きいとの判断を示している。

露天市場の不衛生

食品添加物扱いの農薬は、医薬品よりも安全性について厳しいチェックを受けている。にも拘わらず、なぜ一般市民の不安は消えないのか?たまたま結果として問

題が起きていないだけの開発途上国と、残留基準・安全使用基準に基づく厳しいリスク管理をして問題を起こしていない日本など先進国とでは、関係当局に対する信頼性がまるで違ってくる。露天市場では野菜や果物の鮮度を保つために、ペットボトルに入れた川の水を頻繁にかけていた。抵抗力の弱い子供達に食中毒が頻発するが、マスコミはこの川水から微生物に基因すると思われる食中毒まで農薬に疑いをかけていた。

問題は安全使用基準の不徹底

残留農薬の原因を推察してみると、タイには「どの作物のどんな病害虫に対して、どの農薬を、どんな濃度薬量で、何回、収穫前何日まで、どのように使用するのか」といった安全使用基準に関する情報が一般には全く無い、少なくとも農家にはそれが伝わっていない。残留基準を設定する際にその根拠となる残留分析という大切な作業がスッポリと抜けてしまっているのだらう。そう考えると新聞に報道された「野菜の六〇〇八八%から農薬を検出」の背景が見えてくる。農薬など科学技術が進歩するほど専門家の責任は重く、何が問題で何をすべきかについての具体的なコメントが求められている。

帰国して丸一年たった。農薬がタツブリ残留していると云われるタイの食べ物があんなに美味しくない理由だけは、いまだに良く判らない。



ボラン
ティアの
協働作業
となりま
という。結局、自分でテーマソン

四月二十二日は、国連が定めた地球の日「アースデー」です。パラオでは、海や自然の環境を守る運動をいろいろの機会に計画実行していますが、「アースデー」はその中でも行事規模が最大の特別な日です。

シニアボランティアとして、パラオのラジオ局(エコパラダイスFM)に派遣された私は、その年の「アースデー」の最初の企画会議から参画することになりました。主催はパラオEQPB(環境保全審議会 Environmental Quality Protection Board)。EQPBは、関連公共機関や学校生徒を総動員し、民間企業からも協賛スポンサーを集め、海浜及び周辺道路の「クリーンキャンペーン」と、目抜き通りの「アースデー・フェア」を開催します。私の勤務先は国務省直轄ラジオ局ですから、本来ならEQPBと共催者となっても良い位です。ラジオスタッフが、ラジオのもつ「メディア・パワー」に自信をもってイニシアティブをとればよいのに、随分歯がゆい思いをしました。

アースデーの実施責任者はアメリカのピースコから派遣されているEQPBの環境教育専門家で、期せずして日米マソング発表会を提案しました。ラジオ局のディレクターに作詞作曲できる人はいないか聞くと、「そんなことは今までやったことがない、ために歌詞を書いてくれ」となりま

パラオでの「アースデー」顛末記

福場 正弘(印西市)

消えたテーマソング発表会

ラジオ局らしい企画として、毎年繰り返されるアースデーのテーマソング発表会を提案しました。ラジオ局のディレクターに作詞作曲できる人はいないか聞くと、「そんなことは今までやったことがない、ために歌詞を書いてくれ」となりま

券、漁業連合会のおサカナ券、百貨店から学習セット、ダイビングクラブのサードビスケット、はずれなしのビーチサンダル(300足)などを提供していただきました。結果は、子供から大人までが列を作った順番待ちの大盛況。

グ「地球は友達」(The Earth)を三番まで書く破目になりました。ディレクターにパラオ語翻訳、作曲の手配を指示すると簡単に引き受けてくれました。ところがその先は梨のつづて。アースデーのイベントに間に合わないどころか、結局ウヤムヤになってしま

福場さんの歌詞に曲をつけて下さる方募集!
*The Earth
As stars are sparkling
over the sky,
People are living on the Earth.
Let's chain hands to hands,
you and sky.
Sky is your friend.
Earth is your friend.
I love Belau. Beautiful Belau.
I'll be alone without you.*

付近までは海水の侵入によって既に塩害が進行しています。地下ダムが最も効率的な対策そこで塩水化阻止と更なる地

漸く現地も関心をもち始めた。しかし、帰国して二年近くになつて、工学部副学部長(当時の土木コーディネータ兼C/P)の

緊急に必要な水対策
バハ・カリフォルニア州は陸続きの米国南カリフォルニア同様、半砂漠地帯に位置し、降水量が年間二〇〇ミリ前後と非常に少なく、また半島地形で流域が極めて狭いため、表流水は多くを期待できず、水道水・農業・工業用水のほとんどは地下水に依存しています(年間供給量二千万³m³強)。そのため、今後の人口増や水の需要増を考えると、近い将来水資源の不足が十分予想されます。アメリカと国境を接する州都メヒカリや州最大の経済都市ティファナはアメリカのコロラド川から有料で取水した水を長距離圧送して利用していますが、エンセナダは州最大の広さをもつ市にもかかわらず、立地的にこの恩恵に浴せず、地下水に頼るしかありません。現在、河川の伏流水をポンプアップして取水している最大規模の流域が沿線にワインの里を擁するガダルルッペ川流域ですが、太平洋の河口から約三・五キロ上

滞在中に大学で執筆し出版したダム等建設のための地質調査法と遮水技術の本(スペイン語版)には筆者の経験も含め地下ダムにも言及しました。また、勉強会(Jornadas de Ingenieria)ではエンセナダの水不足問題を掲げ、市民に地下ダムの必要性を提唱しました。それがも当時は、大学人も含め、反応がいまいちでした。

メキシコの水不足解決に日本の先端技術を!
帰国後も続いている啓蒙活動
寺戸 康隆(松戸市)

下水有効利用のため、この地点に貯留量増大と水頭差増高が期待できる地下ダム(通常のダムと異なり、地下の水層につくるダム)を構築するの





JICAのシニア海外ボランティアとして平成十一年四月から十三年四月まで南米チリに滞在しました。チリはアンデス山脈に沿った太平洋側にあります。北はペルーに接し、南は南極までの四千三百キロある細長い国です。

日本では知られていないものは、イースタ島のモアイ像・チリ地震・鮭・ワイン・鉱石です。なかでも銅の産出は世界一で、日本の銅貨や電線のほとんどはチリ産です。資源が豊富なため経済は安定し、治安も南米で一番よいです。しかし南米は犯罪多発地帯のイメージがあります。事実メキシコから中南米の旧スペイン植民地とブラジルの旧ポルトガル植民地の国々は貧困層が多く、失業率が非常に高いです。警察は弱体ですので、利益の高い誘拐が産業化して、主要なビジネスになっています。コロンビア・ブラジル・メキシコの順で誘拐が多発しています。なかでもコロンビアの誘拐数年間三千人以上、メキシコとブラジルは五百人以上といわれています。四番目はアジアになりますが、フィリピンです。ここもかつてスペイン植民地でした。

チリの行方不明者

平成十七年一月現在チリ警察

南米の誘拐事件

山野辺 恭夫（柏市）

臓器売買を歓迎

一方、金銭を伴う臓器売買を活性化せよとする団体がアメリカにあります。臓器売買を禁止している法律を撤廃させ、死者の臓器売買の自由化を訴えています。

多くの若者の交通事故死や脳死者がその臓器を利用され、彼らの家族はその臓器を患者に提供して役立てたいと望んでいる。今、世界で七万人の患者が臓器移植を待っているが、ドナー不足から七〇％は死んでいる。「死者の臓器に値段をつけて正々堂々と売買しましょう」とフリーマーケットのための具体策を提示しています。

シニアボランティアの同伴家族として体験した ニカラグアでの専業主婦生活の報告

斉藤 富貴子
(千葉市)

二〇〇二年十一月私たち夫婦は、中米ニカラグア共和国の首都マナグアに向かつて旅立った。六年前私自身が日系シニアボランティアとしてブラジルに飛んだ時の、不安一杯の緊張感に比べると、今回は、同伴家族という立場だけにリラックスした気分であった。

夫は、ドイツ人によって創設された低所得層子弟を対象とした技術専門学校の建築科に、シニアボランティアとして二年間の任期中で派遣された。

マナグアでは、毎朝五時近くになると時を告げる裏の家の雄鶏の鳴き声で目を覚ました。六時半、庭先の花に飛んでくるハチドリや芝生に飛んでくる鳥たちを眺めながらゆっくり朝食をとる。夫の学校の給食は、大きな一皿に塩味で煮たインゲン豆を上か



2004年11月夫の最終講義に助手として参加。この2年間の夫の労苦を思い感無量でした。

らかけた油炒めのご飯に、煮るか油で揚げたバナナとキャベツの酢漬けを添え、2〜3口程度の鶏か牛肉のどちらかが載せられ、別にコップ一杯のジュースが出る。これはニカラグアの典型的な定食の一つでおいしいのだが、毎日同じようなメニューが続くと夫も音を立てたので、頃合を見計らって弁当を作るようにしていた。夫は水のボトルか、弁当を持参するときはお茶を入れた魔法瓶をもち、自分で書き上げた教科書や辞書類で詰まった重い袋を車に積んで七時二五分かかりに家を出る。

夫を見送ると直ぐ家事をすます。十時半頃になるとテレビでニュースを見るかあるいは食卓を机にしてスペイン語の予習や宿題を始める。買い物は、夫と一緒に土曜日の午前中に一週間分をまとめて行うので、日中は急用以外殆ど外出しない。週の間は、夫が帰宅し、一日の様子をお互いに話しながら夕食を共にするまでは、独りきりの自由時間だった。月曜日と水曜日の三時〜五時にスペイン語の授業を自宅で受けることに決め、それを軸にして時間割を組んだ。授業の当日とその後、前後の両日は予習と復習にあて、辞書と首引きで過ごした。残る金曜日はゆとりの一日とし、友

メキシコの水不足解決に..

（二ページから続く）
メールによれば、地下ダムに関心が見られるようになり、修士の院生にこれを論文テーマにする者もいることを知りました。
昨年十一月に（独）緑資源機構の海外事業部の関係者と会い、メキシコ政府に提出した当該調査報告書（英語版）等も貰い受け、一部を現地の大関係者に送りました。メキシコ政府の実施機関であるCNRAは日本の地下ダム開発プロジェクトに積極性を示しており、中南米の中核国メキシコに日本の先端技術である環境保全型水資源開発技術のソフトが移転されれば、その意義と国益は甚大だと言えます。
不肖筆者も、シニアボランティア時代に得た現地の知己を通じて、開発の必要性について、多くの市民の熱意と要望が高まるようアピールしてきております。

人との交流に使った。毎月最終金曜日には、午後六時からJICA関係者が料理を持ち寄って会食する定例会があり、出かけるのが楽しみだった。

日曜日には、借りたテニスコートで四時頃から日没までプレーし、時には、コンドミニウムにある行水のように暖まった十五mほどのプールで泳いだ。

生活面での不自由、不慣れな気候風土との戦い、昼間の孤独感、

（三ページに続く）



と豚の厳しい禁制の下での悲喜こもごもの実生活の紹介

一月二十五日、市川市市川公民館で開催された地元悠々会主催の「海外事情の学習」に「ちば出前講座」からの派遣講師として私がお話をさせて頂く光栄に浴しました。参加の皆様は、私と同輩のお元氣な方々で、同世代と言ふ氣安さから楽しくお話をさせて頂きました。

内容は、第一部として、JICAシニア海外ボランティアの応募、派遣前の講習、現地活動、現地経験の帰国後の還元について概略を述べ、次に自分のケースとして、ドバイの民間会社勤務していた時に応募してヨルダンのシニア海外ボランティアの一員となり、そこで「業務調整」活動をさせて頂いた報告をしました。

「JICAのシニア海外ボランティアは国民参加型の公募であり、派遣時が六九才までなら皆様も応募が出来る」事を申し上げ、インターネットで募集を見て頂けることも説明して、特に参加の方々にこれを機会に積極的に応募される事をお勧めしました。

「ちば出前講座」の体験 中川安隆（浦安市）

この講演会で一番嬉しかった事は会場の視聴覚室を埋めた皆様が、最後まで熱心に話を聞いて下さった事です。

当日は、シリアで日本語を教えた青年海外協力隊OGの安藤泰子さんも、同じく「出前講座」の派遣講師としてお話されました。

今後このような会合に、当会員が数多く参加して、海外ボランティアの経験を広く伝えられたらいいなと思いました。

酒や豚が税関で有無を言わず没収された悔しい話、醤油が税関に引っかけた話、断食月に事務所への警官の飲食チェックに引っかけた出頭命令が来た話、絞首刑が見世物になっている話、イスラム特有のシャリーア法での結婚の話、子供を亡くしたお母さんの病院とお墓の話、砂ゴルの話など、諸々の異文化の体験談をさせて頂きました。

他にも、ベールートのホテルで就寝中に爆破に出会った話、搭乗中の航空機が故障を起こし迷走飛行した話など、生命に係る怖い経験も紹介しました。

会員参加の「ちば出前講座」一覧表

野田市老人クラブ 南部長寿大学	千葉市花見川区 区民セミナー	市川市雑学大学 第3期悠々会
7月15日(木) 13:30～15:30	9月10日(金) 10:00～12:00	1月25日(火) 13:30～15:30
野田市南部梅郷公民館	千葉市幕張公民館	市川市市川公民館
「青年・シニアの海外における活躍と海外の生活・風習について」	「地域住民への国際交流・協力について」	「海外事情の学習」
黒田昭太郎/マレーシア 知分さん(JOCV/ フィジー)	泉岡輝元/インドネシア 福島章介/ パラグアイ	中川安隆/ヨルダン 安藤さん(JOCV/ シリア)
老人クラブ南部支部の 約60名	登録受講者約20名	登録受講者約50名
表の構成は、上段から「講座の名称」、「開催日時」、「開催場所」、「講演テーマ」、「講師名(当会員敬称略)」、「受講者」の順		

ちば出前講座

千葉県国際交流センターとJICAの共催で、千葉県下の教育現場や地域社会に、国際理解・開発教育や異文化理解・国際協力の大切さを知ってもらうための講師派遣事業です。

千葉県国際交流センターに勤務(「JICA国際協力推進員」)の大山美砂子さんが担当されていて、各所からの要請に基づいて、この種講演会の企画があり、講師を採っている場合など、早めにJICA関係者(当会員及び青年海外協力隊OBを含む)をはじめ、各方面からの講師派遣をアレンジしているものです。

本年度は、右表の三つの講座で当会員四名が講師を務めています。民族衣装での登場など、パフォーマンスに優れた元協力隊員と豊富な体験を語る当会員の組み合わせが、好評のようです。

事務局便り

現在、ほとんどの会員の方はメールをお持ちなので、これを利用して活発な意見交換がなされる場を作ればと思っております。よろしくご指導くださるようお願い申し上げます。

(山本修身)

ニカラグアの専業主婦生活

と苦労話も、数え上げれば限りがないが、夫の最終講義に出て、夫が悪戦苦闘の末にかちとった達成感を共有できたことで、すべてが楽しい思い出に変わった。

日本では、主婦業に夫の事務所のサポートそしてボランティアなど外で活動する時間が長く、毎日刻みで、こまねずみのように働くことに喜びと満足を感じていた。その反面、働けなくなった時の自分の姿が想像できず、不安に思うこともあった。ニカラグアの豊かな自然の中でゆとりの時間を持ち、その使い方を体験したことによってもう一人の自分を発見できたような気がする。素晴らしい機会を与えて下さったJICAに感謝している。

(6ページから続く)



浦安市国際交流・協力 フェスティバル 2005 1月16日(日) ショッピングプラザ 新浦安

ドイツニール
ンドを抱え、外国
人の住民も多い、
国際都市浦安。
昨年に続き二度
目の出展。割り当
てられたステー
ジタイムには、大
山さんの紹介に
続き、品川、梅
谷、黒田、宮崎さんが壇上から、
シニアボランティア制度を大いに
アピールしました。生憎の冷雨
で、年配者の来場が少なかったの
か、昨年に比べ、シニアボランティ
ア応募相談の数が少なかったの
が残念です。市井さん、中川さん、
宮崎夫人も応援。写真は当会ブ
ースを訪れた松崎市長と懇談する
地元会員三人。後姿が大山さんと
品川会長。

東葛飾地区 国際交流のつどい 2004 11月14日(日) 県立手賀の丘少年自然の

例によって、千
葉県国際推進員
の大山さんが大
車輪の活躍。当会
からは、黒田、山
本両幹事が参加
したほか、松戸市
の泉岡さんが応
援に駆けつけて
くれました。

会員数の比率の高い東葛地区
で何か JICA の行事をと
悲願が実つて、野田、我孫子、流
山の三市と沼南町の国際交流協
会の合同イベント(今年で八回
目)に初出展しました。
「手賀の丘少年自然の家ま
り」と同時開催ということで、普
段は静かな会場周辺が、五千五百
人の人出で賑わいました。お陰
で、当会のブースも、用意してい
た「募集案内」等が全冊捌ける盛
況ぶりでした。



千葉市国際ふれあい フェスティバル 2005 2月13日(日) 幕張メッセ国際会議場

主催は、千葉市
国際交流協会。
JICA ブース
に、今回はじめて
当会も参列しま
した。
後藤優、影山、
黒田洋平、梅谷、
上田の皆さんが
参加。協力隊 O
B 会からも吉田会長代行以下数
名の方が参加され、大山さんが全
体のとりまとめ役でした。
浦安での第一回目参加以来当
会の目玉となっている、「国際協
力クイズ」はここでも好評でした。
プログラムの一つに、小学校の
先生の海外研修旅行(JICA 主
催)成果発表があり、JICA 東
京の小樋山所長も来場、ブースで
皆さんと語り合う場面もありま
した。



国際フェスティバルへの参加

日本の表玄関成田空港を抱え
る千葉県では、県内各地で
国際交流の催しが開かれて
います。これらの行事に参
加して、JICA の事業、
特にボランティア事業につ
いて積極的に PR すること
も、当会の重要な活動の一
つです。

独立行政法人国際協力機構
と千葉県 JICA シニアボラン
ティアの会の二枚看板を掲げ
ての参加ですから、JICA
A 東京の承認を得た上で、
展示内容などについても、
全面的な支援を受けること
になります。展示品の中
に、会員の海外での活動ぶ
りを紹介する写真パネルの

共に楽しみながら・・・ 大山美砂子

頭に、千
葉県内
を駆け
回って
いる皆
さんの姿を見ると、「私
も負けていられない！」
という思いになります。
これから共に楽しみながら
活動してゆければと願っており
ます。



JICA、ちば出前講座、本
紙に対するご意見、お問
い合せは下記にお願いし
ます。
千葉県 JICA
シニアボランティアの会
04-7131-5830(黒田)
千葉県国際協力推進員
043-297-0245(大山)
jicadpd-desk-chibaken
@jica.go.jp

まだ未熟ではありますが、当
会の発展とともにさらに充実
した会報発行に努めてまいり、
情報・記録のお知らせと会員の
皆様の相互理解、親睦の場とし
て活用していただきたい所存
であります。今後とも会員の皆
様の一層のご支援とご協力を
お願い致します。(黒田昭太郎)

編集後記

会報 2 号をお届けしま
した。今年度は昨年度に
まして当会の活動範囲が
広まり、さらに会員の皆
様からの原稿、アンケー
ト回答も数多く寄せられ
ました。限られた紙面に
いかに掲載するか担当として
四苦八苦の嬉しい悲鳴をあげ
ました。

数が増えてきたのが、私たちの自
慢です。
今年は上記三つの国際フェス
ティバルに出展して、当会の存在
をアピールできました。主催者で
ある各国国際交流団体との打合せ、
JICA 東京との調整、展示企
画など国際交流推進員の大山さ
んのガンバリがあつてこそ、実現
できたものです。大山さん、有難
うございました。